

特権を食る体制転換貴族、赤いマフィアの跳梁

盛田 常夫

ブダペスト市の交通公社 BKV をめぐる退職金スキャンダルは、BKV に限らず、予算機関や公共事業体トップの「ぼったくり」報酬問題を明るみに出すことになった。政令による報酬体系公開は、現代のハンガリーのエリート層の特権的な高額報酬が一部の公企業に限られたものではなく、ほとんどすべての企業にかかわっていることを白日のもとに曝け出した。体制転換以後、ブダペスト市を牛耳ってきた社会党と SZDSZ の責任は免れない。社会党は「利権食い」の責任を SZDSZ に押し付けようとして、ブダペスト市議会の与党は分裂することになった。しかし、とにかく腐敗した事実を正確に公表することが先決である。

オスコー蔵相の邸宅問題

現在、ブダペスト二区の丘陵地帯の斜面に、オスコー蔵相が大邸宅を建築中だ。1000 平方メートルを超える敷地に、400 平方メートルを超えるホテルのような外観の邸宅が建設されている。当初は人工の滝の建設も計画されていたが、メディアが注目する段になって、これは中止されたようだ。上物が大きすぎて、建築許可を受けた図面を修正して、建物を支える地下部分を大きく広げた。その問題を FIDESZ が取り上げて、この邸宅建設が話題になり始めた。

FIDESZ もメディアも建築許可なしの増築を問題にしているが、そのような形式的な問題より、何故にこのような若者がブダペストの最高級地に数億 Ft もする邸宅を建設できる財力をもっているのかの方が、よほど興味深い。明らかにオスコー蔵相の資産の元手は、デロイト会計事務所社長時代の報酬である。デロイトの初代ハンガリー社長だったケメネシュ・エルヌーは筆者の友人だが、1990 年代の初めに、「社長の月額報酬は、これまで 20 数年の仕事で得た所得総額より大きい」と語ってくれたことがある。ハンガリーの金融機関のトップには信じられないような報酬が支払われているのである。

商業銀行や会計事務所のような金融関連企業の報酬体系は欧米のそれに倣っている。当該国の所得水準を無視した報酬が支払われている。実際に会計事務所社長の報酬がどれほどなのか、具体的な数字を知ることはできないが、一つの参考数字がある。週刊誌 HVG に掲載された情報によれば、商業銀行大手の MKB 銀行頭取の月額報酬は、実に、1300 万 Ft だという。これに各種の手当が付くから、グロスで 1500 万 Ft 程度だろうか。要するに、年間 1 億円近い報酬が支払われている。会計事務所社長の報酬もこれに匹敵するだろうから、4 億 Ft もの邸宅が建てられることに驚く必要はない。国外で資産運用できるほどの余りある資産が形成されているのだから。

商業銀行や会計事務所は民間企業だから何の問題もないと言い切れるだろうか。9 月の G20 会合では投資銀行の成功報酬の上限設定や規制が議論されたが、インヴェストメント・バンカーの報酬だけが問題なのではない。金融機関、それもトップ経営者の報酬体系

が非常識なのである。ほとんど名誉職的な仕事しかしていない頭取や社長連中が、役得のように高額報酬を得ている姿は、少なくとも金融危機に見舞われたハンガリーに相応しいものとは言えない。

夏になるとバラトン湖にヨットの花が咲くが、そのほとんどが金融関連企業トップの「舟遊び」だ。大きな別荘を作り、「舟遊び」に興じる彼らは、まさに現代の貴族、そう「体制転換貴族」である。体制転換によって外資系の金融機関がこぞってハンガリーに進出し、一部のエリート層が多国籍企業によって保証された高額報酬によって、一般国民とはかけ離れた優雅な生活を送るようになったのである。

「甘え」の構造

国が小さいハンガリーでは、経済大学の金融学科を卒業すれば、すぐに銀行・証券あるいは会計事務所やコンサルティング会社の本社勤務になる。日本のように、地方の支店を回って経験を積んでから本社に戻すようなシステムはない。大学を卒業して数年もすれば本社の課長になり、ほんの少し同期の仲間より能力があることを見せれば、20歳代でも部長に抜擢され、30歳代そこそこで役員になることも稀ではない。それほど実務経験がなくても、頭が切れるところを見せれば、信じられないスピードで出世街道を走ることができる。

2009年に発足したバイナイ政権で大蔵大臣に抜擢されたオスコー・ピーテルは、ELTE（エトヴォシュ・ローランド大学）を卒業して、10年そこそこでデロイト会計事務所社長に抜擢され、バイナイ政権で大蔵大臣に就任するというホップ、ステップで出世することになった。大手会計事務所の顧客はすべて多国籍企業であり、大手会計事務所自体も多国籍企業である。多国籍企業のビジネスの輪に入り込み、現地スタッフとして仕切り役を任されれば、国外で資産を運用しなければならないほどの所得が得られるのである。

金融機関における報酬の高止まりが、公共事業体の報酬体系に影響を与えている。民間と競争できるような人材を確保するために、公共事業体でも報酬を高く設定しなければならないという論理がまかり通っている。しかも、公共事業体の役員人事は政権交代によって大きく影響されるので、政治的リスクを込めた報酬になるとも説明されている。正常な精神をもっていれば、「何かが間違っている」と感じるだろう。

最新情報によれば、国立銀行総裁の現在の月額報酬は810万 Ftで、ボーナスは支給されない。これが一つの基準になって、公的金融機関のトップの報酬が決まっている。たとえば、国家開発銀行総裁439万 Ft、ハンガリー輸出入銀行総裁434万 Ft、ハンガリー国家資産管理公社CEO420万 Ft、大赤字の国鉄総裁410万 Ft、高速道路管理公団理事長352万 Ft、ハンガリー郵便社長340万 Ft、ハンガリー電力社長332万 Ftと続くが、この数値が報酬額のすべてではない。この基本報酬額に8割のボーナスが付くから、たとえば国家開発銀行総裁のボーナス込みの報酬額は790万 Ftになる。さらに、これに福利厚生補助として月額111万 Ft、経営委員会手当として162万 Ftが付加される。これは年額ではなく、

すべて月額の数値である。これをすべて合計すると月額 1063 万 Ft となり、商業銀行頭取の報酬に近づくというわけである。

ちなみに、ブダペスト交通公社社長のコチシュ・イシュトヴァーンの基本報酬 150 万 Ft と低めだが、これに 150%のプレミアムが付加されている。何のことはない、月額 375 万 Ft が実際の報酬額である。もちろん、これに経営委員会手当、福利厚生手当が付くだけではない。コチシュは社外でも有給・無給の経営委員や監査委員を 20 役もこなしているのも、その手当額だけでも BKV の基本報酬を超える。「これだけの役職をこなしてどうやって BKV の社長職を勤めているのか」というテレビ記者の質問に答えて、渉外担当者は「コチシュ社長は自由出勤になっているので、弾力的に時間を使うことができる」と答えていた。ハンガリーではこの種のスーパーマンがたくさんいるから恐れいる。

社会党も SZDSZ もスーパーマンのコチシュに絶大なる信頼を置いているらしい。テレビ画面からみる限り、社会党の副知事であるホルバート・チャバなどは、コチシュに肩を抱えられてニコニコしている。すべての悪は歴代の社長にあり、コチシュは BKV の悪弊と闘い、大掃除ができる人物だと評価されている。9 月末には BKV の高額退職金の支払いに不正な処理があったとして、BKV を代表したコチシュは実行者不明のまま告訴状を出した。しかし、実は、コチシュ自身が BKV の退職金不正支給額をはるかに上回る公金横領で捜査対象になっているのだ。

MVM 資産横領事件

コチシュは成功したビジネスマンとして MVM(ハンガリー電力)から BKV へ移動したのではない。2008 年 3 月にコチシュはジュルチャーニイ首相によって MVM 社長を解任されたのだ。ところが、失脚したはずのコチシュが、その後に BKV 社長に就任した。公共企業体の経営者や与党の政治家たちが、自らの利益を守るために、お互いのポストを融通し合う仕組みが出来あがっている。コチシュ解任は MVM 社長時代に締結された数々の不明瞭な資金貸与契約や顧問契約で、MVM が巨額の損失を被ったからである。投資ファンドへの資金流出、不明朗な電力売買契約、発電所譲渡契約、クロアチの MVM 所有のホテルへの支払い、各種の国外企業との顧問契約等など、実に多くの不可解な契約を通して、企業資産や資金が外部に流出した。

この MVM 資金流出は、「体制転換貴族」と「赤いマフィア」が結託したものである。カーダール政権時代に工業大臣を務め、体制転換後にロシアとウクライナの人脈を利用して電力事業を進めて億万長者になったカポイ・ラースローは電力売買で MVM の経営陣と長年にわたって密な関係にあるが、カーボイの会社 (System Consulting Zrt.) が所有していた Karpat Energo Zrt.に MVM が資本参加することになり、当時の MVM 副社長モルナル・ラースローがこの会社の代表に就いた。そして、2008 年 3 月 13 日、MVM はこの会社にプロジェクト資金として、150 億 Ft (5530 万ユーロ) を融資することを決め、Karpat Energo は 3 月 17 日にこれを引出し、3 月 20 日にルクセンブルグの投資会社 Power Investment International II. S.Á.R.L.に 90 億 Ft (3255 万ユーロ) を融資した。この投資会社は 2007 年 12 月にケマイン諸島に設立されたもので、ハンガリーの「赤いマフィア」であるサース・アンドラーシュがルクセンブルグの代表を務

めるペーパーカンパニーである（コチシュはサース・アンドラーシュと個人アドバイザー契約を結んでいただけでなく、サース所有の会社ともアドバイザー契約を結んでおり、MVM 資金がサースに流れている）。そして、この会社は 5 月 24 日に、MVM が所有していた Vértes 発電所の購入代金の一部という名目で、4 億 3000 万 Ft（172 万ユーロ）を MVM に支払ったのである。この Vértes 発電所の民営化で落札したのはカーポイの System Consulting 社であるが、Power Investment International がその代金の一部を肩代わりするという奇妙な取引が行われた。明らかに、MVM から融資された資金が回り回って、MVM 保有の発電所の購入資金として MVM に支払われたのである。さらに、Karpát Energo は 7 月 9 日に 14 億 Ft（575 万ユーロ）を出資して、Power Investment International の株主になり、続いてこの株式をパナマ国籍の正体不明の会社 System Investment Corporation に譲渡した。明らかに詐取した資金のロンダリングが行われた。詐取した資金で、所有権を買うという「錬金術」は、サース・アンドラーシュが Postabank 銀行の株式取得でも使った常套手法である。この時は資金の詐取に成功したが、Postabank 銀行株式取得には失敗した。MVM の資金流出はサース・アンドラーシュが仕組み、カーポイと MVM の当時の経営陣が共謀した詐欺事件である。

MVM の資金流出はこれにとどまらない。MVM が従業員の保養施設への支出という名目で、クロアチアのホテルの賃貸サービスの締結に、イギリスに本拠を置くオフショア企業 Jadran Investments Ltd. を仲介役として介在させるという奇妙なスキームが編み出された。MVM は MVM のクロアチア子会社 NIKER に 430 万ユーロを融資し、NIKER がイギリスのオフショア企業との間でホテルとの賃貸・サービス提供契約（2032 年までの使用契約）を結び、350 万ユーロが支払われた（2008 年 1 月）。ところが、NIKER とイギリスのオフショア企業は、2008 年 7 月に、合意の上でこの契約を破棄した。しかし、350 万ユーロは返済期限の 2009 年 1 月 19 日を過ぎても返済されず、現在に至っている。ハンガリーのメディアが伝えるところによれば、このイギリスのオフショア企業の所有者は、「Mrs. Istvan Kocsis」と登記されているという。MVM によれば、2009 年 7 月現在、クロアチのホテルの所有権も使用権もなく、支払った 350 万ユーロは返済されていないという。ハンガリーのメディアにたいして、コチシュ・イシュトヴァーは、「Jadran Investmenets が誰のものか知らないし、家族は関係していない」と主張し、イギリスの企業登記データは同姓同名の別人と主張している。

この一連の詐取事件のキーマンである「赤いマフィア」のサース・アンドラーシュは、スコットランドの富豪で不動産を営むケヴィン・マックケイブが代表を務めるハンガリーの会社 Esplande Kft. の責任者で、この会社がサッカーの名門チームを持つ FTC スポーツクラブの不動産を 30 億 Ft で購入した。サース・アンドラーシュがどのようにマックケイブを口説いたのか分からないが、1990 年代に数々の詐取スキャンダルに絡んだ Nador '95 Rt. を英国の会社に売ったように見せかけ、過去の痕跡を消そうとしている。現在の FTC の代表はカーダール時代の秘密諜報員である。過去に何度も横領や詐欺の容疑で捜査を受けながら、疑りもせずに公金横領に絡んでいるサース・アンドラーシュを逮捕・立件できないハンガリー検察の能力は推して知るべしである。

MVM 資金の流出はこれにとどまらないが、そのすべてにカーポイとサース・アンドラーシュが絡んでいる。MVM 前社長コチシュ、コチシュの配下だった副社長モルナル・ラースローが、MVM 外ではカーポイ、サースの他に、影のフィクサーである社会主義労働者党時代の党本部会計責任者のマーティ・ラー

スローが絡んでいる。まさに「体制転換貴族」と「赤いマフィア」が、白昼堂々と次から次へと公金横領に手を付けている。MVM は一連の巨額資金の流出の告訴し、現在も捜査が続いているが、旧社会主義労働者党や社会党の裏人脈が絡んでいるので、政権が変わるまで実質的な捜査は進展しないと言われている。

コチシュ・イシュトヴァーンは BKV の高額退職金問題の処理で自らの潔白を証明し、経営者としての能力を誇示しようとしているが、明らかに MVM 社長時代の巨額資金の流出事件捜査への牽制行動が見え見えである。それにしても、ハンガリーの体制転換に伴う象徴的なトチック事件、Postabank 事件で何の成果も上げられなかったハンガリーの司法は、MVM の資産流出事件でも政界とつるんだ犯罪集団、赤いマフィアを断罪できないだろう。

(関連する分析は、<http://morita.tateyama.hu> を参照されたい)